View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hosei University Repository

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

蘇我氏と七世紀前半の東北経営

著者	新井 隆一
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	84
ページ	21-47
発行年	2015-09-30
URL	http://doi.org/10.15002/00022255

蘇我氏と七世紀前半の東北経営

新井隆一

はじめに

六世紀後半から七世紀後半の東アジアは、倭・百済・新羅・高句麗の軋轢、隋の高句麗遠征、唐の百済・高句麗への侵攻など、激動のときを迎える。唐・新羅連合軍との白村江の戦いで苦杯をなめた倭王権は、艱難を乗り越えるべく、律令制国家の形成を目指し、対内・対外的に様々な施策を発信する。とくに、対外的には、朝鮮半島の争いを勝ち抜き、唐の影響力を駆除した新羅を諸蕃とし、日本列島の東北・北海道と南九州のまつろわぬ集団を「蝦夷」「隼人」と把握して夷狄とし、大宝元年（七〇一）成立の大宝令のなかに位置づけ、朝貢・服属を促した。本稿は、そこに至る過程のなかで、七世紀前後の倭王権の東北経営の一コマを描きたい。

そこで、『日本書紀』を紐解くと、渟足柵・磐舟柵の設置、阿倍比羅夫の北航など、北日本海方面への影響力を徐々に強めたことがわかる。一方、考古学の成果に目を向けると、仙台平野から大崎平野ののちの陸奥国にあたる地域に、仙台市郡山遺跡や大崎市名生館遺跡など、城柵官衙を造営したことが窺われる。その周りには、関東から搬入された土師器の出土する集落遺跡が数多く営まれ、移民すなわち柵戸・鎮兵の生活臭を漂わせる。ここで、当該期の東北経営を考えるうえで、大きな問題が横たわる。それは、文献上の記録が残る北日本海に比して、考古資料に表れる太平洋側の様相が、『日本書紀』には一切記されていないことである。とくに、郡山遺跡は、多賀城以前、初期の陸奥国府

と推定される遺跡である。いったい、この問題を解く鍵はどこにあるのだろうか。

そこで、八世紀のいわゆる征夷の段階で、古代国家が任命した陸奥守をはじめとする東北官人の出自を辿ると、石川氏・紀氏・坂上氏など、七世紀前半、王権で勢力を奮った蘇我氏と密接にかかわった氏族の人物が多いことに注目したい。しかも、彼らは、東大寺・盧舎那仏の鍍金に伴う天平産金以降の、征夷と産金が連動する八世紀後半にひときわ輝いている。そもそも日本列島で金の需要が圧倒的に高まったのは、六世紀中葉の仏教伝来に伴う造寺・造仏ラッシュ以降で、その中心に存在したのは蘇我氏であった。まして、東北の太平洋側は、天平産金の際に、聖武天皇が狂喜乱舞したように、当時の日本列島唯一の産金地帯であった。そうだとすれば、時期を遡って、蘇我氏と金鉱開発をキーワードに、太平洋側の東北経営を思案できないか。

以下の考察では、六世紀後半、仏教をめぐって勃発した蘇我・物部抗争の影響がいかに東北へ及んだかを皮切りに、抗争を制した蘇我氏が徐々に東北へ勢力を伸張させていく姿を浮上させる。そして、蘇我系の人脈を使った東北経営が、大化改新以降、征夷の段階でも継続することを明らかにする。そのことを通して、本稿の大きなテーマである、七世紀前半の倭王権の太平洋側の東北経営とそれが『日本書紀』に記載されなかった理由について迫ってみたい。

一、蘇我・物部抗争と東北
―「蝦夷」綾糟の服属前後

六世紀前半から中葉にかけて、加耶の喪失・新羅の台頭という国際環境が引き金となり、日本列島の各地に動揺が生じ、それまで倭王権の東北進出をけん引してきた上毛野氏の勢いに翳りが生じる。このため、五世紀後半、北上川中流域・角塚古墳まで足跡を刻んだ王権の東北進出は、一時的にストップする。[1] そして、笠原直使主と小杵の武蔵国造の地位をめぐる争い、「武蔵国造の乱」は、使主が王権、小杵が上毛野君小熊に支援を求めたことによって、武蔵から毛野一帯を混迷に陥れる。両者の対立の様相は、北武蔵の埼玉古墳群内で、前方後円墳の二子山古墳と大型円墳の丸子山古墳という、ともに首長墓クラスの墳墓が並立することにも表れるといわれる。[2] この結末は、「使主―王権」が勝利し、使主は国造に就任、王権は南武蔵の多摩川流域の四ヶ所とともに毛野にも緑野屯倉を設ける。このことによって、南武蔵まで力を及ぼしていた上毛野一族の勢力は大きくそがれた。[3] こののち小熊の消息は定かではないが、

こうした混乱の過程で、王権の実力者・物部氏が毛野へ触手を伸ばしていく。八世紀以降の年代が充てられる出土文字資料であるが、高崎市矢田遺跡では、「物部郷長」「物部」と刻まれた紡錘車が出土し、前橋市上野国分寺跡にも「山字物マ子成」という文字瓦がある。物部氏の分布は、のちの甘楽郡・多胡郡・緑野郡・群馬郡・新田郡など上野国一帯に認められる[4]。物部氏は、五世紀後半に台頭し、大王の側近として仕え、軍事・警察と在来の神々の祭祀に関わる任務に就いた豪族で、のちの令制国・五十二ヶ国、五畿七道の広範囲に分布する[5]。おそらく、六世紀前半の武蔵国造の乱のさなか、王権に助けを求めた使主を支援することを通して、武蔵や毛野への進出を企てたのであろう。ほぼ同じころ北部九州でも筑紫君磐井が叛旗を翻すが、王権は物部麁鹿火を大将軍として派遣、一年余に及ぶ激戦の末、磐井を下した。その後、磐井の子・葛子は、反逆罪に連座することを恐れ、玄界灘に面した港湾地・糟屋を屯倉として献上する（『日本書紀』継体二十二年（五二八）十二月条）。このことによって、王権は、自らの側に付いた北部九州の首長層を、国造に編成することに成功した[6]。このころ王権は、関東から北部九州までの各地の首長層を国造とし、屯倉の管理を委ねることによって、地域支配の浸透を図っていく[7]。さらに、毛野と筑紫では、緑野屯倉と糟屋屯倉の経営を通して、東北や朝鮮半島をも視野に入れた交通の一元的管理を目論んだとも説かれる[8]。こうした経過を辿りつつ、物部氏やこれ以降覇権を争う蘇我氏などの王権の実力者は、各地へと進出し、国造との関係を介して、屯倉との経済的関係を有していくといわれる[9]。とすれば、毛野では、物部氏が小熊とは異なる上毛野一族を国造とし、緑野屯倉の経営を委ねることによって、貢納・収取などの経済的関係を結び、王権の支配の拡充を図ったのであろう[10]。

ところで、物部氏は、大和山辺（石上）や河内渋川など自らの本拠に渡来人を積極的に招き入れ、奈良県天理市布留遺跡や大阪府柏原市大県遺跡など大規模な鍛冶関連遺跡を営んでいた。毛野進出にあたり、国造となった上毛野一族に対して、緑野屯倉の経営のために、そうした渡来系の人々の技術を提供したことが推測される[11]。物部氏と対立した蘇我氏も、発展の礎を築いた大臣・稲目が自ら出向いて吉備の白猪屯倉を設置し（『日本書紀』欽明十六年（五五五）七月壬午条）、農業経営と瀬戸内海交通の管理に乗り出すことによって、地域への勢力の拡大に努めている[12]。白猪屯倉は、中国山地に所在し、鉄・銅の産地として著名な美作国・大庭郡付近にあり、渡来人の手で鉱山開発が行われたこと

も憶測される。屯倉と、渡来人・地域資源・鉱山開発なども密接な関連があったのである。このような物部氏・蘇我氏の台頭、地域への進出は、倭王権と東北との関係にもインパクトを与える。

〈史料一〉『日本書紀』敏達十年（五八一）閏二月条

蝦夷数千、寇二於辺境一。由レ是、召二其魁帥綾糟等一。《魁帥者、大毛人也。》詔曰、惟、儛蝦夷者、大足彦天皇之世、合レ殺者斬、応レ原者赦。今朕遵二彼前例一、欲レ誅二元悪一。於レ是、綾糟等懼然恐懼、乃下二泊瀬中流一、面二三諸山一、歃レ水而盟曰、臣等蝦夷、自今以後、子々孫々、《古語云二生児八十綿連一。》用二清明心一、事二一奉天闕一。臣等若違レ盟者、天地諸神及天皇霊、絶二一滅臣種一矣。

〈史料一〉は、六世紀後半、ヤマトへ連行された「蝦夷」の首長・綾糟が、王権の聖地・三輪山に向かい、服属と忠誠を誓った儀礼の様子を記している。三諸山すなわち三輪山は、奈良盆地の南東部に位置し、周辺には三世紀以来の大型前方後円墳が造られるなど、古くから王権の信仰を集めていた。つまり、この服属儀礼は、三輪山という伝統的な祭祀空間で、泊瀬川に入り水をするという、自然神・アニミズム的な観念のもと行われたのである。三輪山は、神体に大物主大神が祭られており、物部氏とのゆかりを感じさせる。三輪山に沿って、山辺の道を北上すると物部氏の祭祀の拠点・石上神宮が所在する。物部氏は、三輪山の祭祀を掌握することによって、急速に力を蓄えたとさえいわれる。[13] とするならば、三輪山に向って忠誠を誓わせた「蝦夷」綾糟の服属儀礼は、物部氏が関与した可能性が高い。このことは、六世紀後半に倭王権の東北進出が再開されたこととともに、その影に物部氏が見え隠れすることを示唆する。彼らは、緑野屯倉を経由し、さらに北へと歩を伸ばしたのであろう。従って、緑野屯倉は、単なる毛野における貢納の拠点にとどまらず、それまで上毛野氏が独自にもっていた東北交通のパイプを視野に入れて建てられたとも考えられよう。のちに述べるように、古代国家から「蝦夷」や「俘囚」などと把握されながら、物部を賜姓された首長層は、かつて築かれた最北の前方後円墳・角塚古墳の周辺や、この先の征夷のときには限界点となる北上川上流域の斯波にまで認められる。角塚古墳の近傍に営まれた中半入遺跡では、鍛冶関連遺構が検出され、上毛野氏と渡来人による資源開発が行われたことも想像されている。[14] つまり、物部氏の影響は、上毛野氏の足跡が辿れる陸奥・山道

沿いに、奥深くまで踏み込み、北上川中上流域にまで及んだのである。物部氏は、上毛野氏からの情報をもとにしつつ、躍進を支えた軍事力に必要な鉄などの資源を東北に求めたのであろう。

それに対して、もともと葛城盆地の北部・大和宗我を基盤にした蘇我氏は、六世紀中葉の稲目のときに飛鳥への進出を加速させ、大臣として大王位の継承に関与する王権屈指の豪族に成長していた。[15] ちょうど稲目の台頭と重なる欽明大王の時代、百済から伝来した仏教は、王権の有力層のなかに急速に浸透していた。稲目の子の馬子は「蕃神＝仏教」の祭祀権を委託され、飛鳥寺の建設を推し進めるなど、仏教政策の中心的存在となる。従来、王権の祭祀に通暁していた物部氏は、仏教に関する祭祀権を握れず、蘇我氏との対立を深めていく。[16] まさに、〈史料一〉は、蘇我馬子と物部守屋の敵対が決定的になっていたときの出来事であった。しかも、両者は、敏達大王の死去に伴い、「馬子―用明」「守屋―穴穂部」を擁立し、王位継承争いに介入していく。この争いの最中、馬子の仏教政策に反対の立場をとり、守屋と行動を共にしていた敏達大王の寵臣・三輪逆が、穴穂部と対立し、本拠の三輪山に籠るという事件が起こる（『日本書紀』用明元年（五八六）五月条）。逆は、穴穂部が敏達の后・炊屋姫（のちの推古）を犯さんとしたことを阻止しようとしたという。自らの欲望を満たしきれず激怒した穴穂部は、馬子と守屋に逆の討伐を命ずる。これに対して、馬子は静観、守屋が中心となり逆を攻め殺害する。この直後、馬子の擁立した用明大王の死去によって、王位継承争いは深刻化する。結局、逆の離脱も尾を引いたのか、「守屋―穴穂部」は王権内で孤立、馬子らによって滅ぼされる。とするならば、三輪逆の去就は、仏教政策と王位継承が相混ざり、「守屋―穴穂部」派が内部分裂を起こしていたことを憶測させる。要するに、当初、反仏教で守屋に付いていた逆は、王位継承を顧みて気性の激しい穴穂部を見限り、馬子の側へと寝返ったのではないか。想像を逞しくすると、蘇我氏は、逆の寝返りを契機として、古来よりの王権の聖地であった三輪山への関与を強めることにも成功したのではないか。ただし、敏達十四年（五八五）までは、逆は守屋と行動を共にしており（『日本書紀』敏達十四年六月条）、〈史料一〉の時点では、三輪氏は物部氏に近く、その本拠で行われた服属儀礼に蘇我氏が関係したとは考えにくい。まして、蘇我氏が推進する仏教よりも伝統的な三輪山を儀礼の場としたことが、何よりの証拠となろう。飛鳥寺の西側の空間など、仏教的施設とかかわりある場所が「蝦夷」

の服属儀礼の場となるのは、仏教受容後、百年あまりが経過した七世紀中葉から後半にかけてのことである。

しかし、仏教の祭祀権を握った蘇我氏は、物部氏にも増して、より一層、東北の資源や特産物を欲したと考えられる。馬子は、用明二年（五八七）、法興寺（飛鳥寺）の建立を発願する。翌年には、百済から僧・技術者などを招聘し、本格的に建設に着手する（『日本書紀』崇峻元年（五八八）是歳条）。そして、飛鳥寺の塔心礎から玉類・耳飾・延板・飾金具・鈴などの金製品が見つかっている[17]。本尊には、飛鳥大仏の通称で知られる釈迦如来像が造られた。この仏像の目や鼻の部分には、鋳金の痕跡が確かめられるという。百済の都・扶余に築かれた王興寺でも、大量の金製品が出土する[18]。要するに、金は、種々の仏教関連品を作製するのに、必要不可欠のものであった。倭王権は、飛鳥寺の建設にあたり、高句麗からも金を輸入している（『日本書紀』推古十三年（六〇五）四月辛酉条）。こうして、仏教が幅広く受け容れられたことによって、圧倒的に金の需要は高まったのである。その中核を担った蘇我氏が、のどから手が出るほど金を欲したことは間違いない。すでに、五世紀後半、上毛野氏を通して王権にもたらされた情報のなかに、東北に金資源が眠っていることが入っていた蓋然性が高い[19]。そうした情報をもとに、東北への野心をむき出しにしたのではないか。守屋を倒し権力を安定させた馬子は、東山道・東海道・北陸道へ使者を派遣、東山道へ赴いた近江臣満に、「蝦夷」との境界の地を視察させている（『日本書紀』崇峻二年（五八九）七月壬辰条）。視察の目的の一つは、資源探査であったとも想像できる。六世紀後半から七世紀前半にかけて、蘇我氏によって、東北の金を探し求める気運が強化されたのである。

〈史料二〉『続日本紀』神護景雲三年（七六九）十一月己丑条

陸奥国牡鹿郡俘囚外少初位上勲七等大伴部押人言、伝聞、押人等本是紀伊国名草郡片岡里人也。昔者、先祖大伴部直征二夷之時、到二於小田郡嶋田村一而居焉。其後子孫為レ夷被レ虜、歴レ代為レ俘。幸頼二聖朝撫運神武威一レ辺、抜二彼虜庭一、久為二化民一。望請、除二俘囚名一、為二調庸民一。許レ之。

そこで、紀伊から海上ルートで東北を目指し、土着した勢力が存在したことを示す〈史料二〉に着目したい。紀伊は、その名の通り、紀氏の根拠地である[20]。紀氏は、東アジアの

緊迫感が増した五世紀前半には、軍事基地として和歌山市鳴滝遺跡群を形成するなど、古くから王権の朝鮮半島への遠征のときに活躍していた[21]。地元に紀直が国造として根を張るのみでなく、中央にも紀臣が出仕するなど、王権とも深いパイプを築いていた。大伴部押人の先祖の地として登場する紀伊国名草郡は、まさに「紀伊水門」の所在地であり、ここから朝鮮半島遠征で著名な「紀伊水軍」が出発した[22]。また、紀氏と蘇我氏は武内宿禰を共通の祖先とし、海産物の食膳関係で結びつき、極めて密接な関係をもっていた[23]。蘇我氏の本拠・大和宗我は、下ツ道を通じて木（紀）ノ国へ向かう交通の要衝であった[24]。蘇我稲目は、紀伊に海部屯倉を置いている（『日本書紀』欽明十七年（五五六）十月条）。物部守屋との対決の際には、馬子側の将軍の一人に紀男麻呂宿禰の名がみえる（『日本書紀』崇峻即位前紀）。そのうえ、〈史料二〉の大伴部直は大伴氏の配下の部民で、『日本書紀』雄略九年（四六五）五月条に「汝大伴卿、紀卿らと同国近隣の人にして」とあり、紀氏と大伴氏は、朝鮮半島への遠征などによって深く通じていた[25]。大伴氏は五世紀後半の物部氏との政争に敗れたのち、蘇我氏の配下となり、軍事部門の一翼を担うようになっていた[26]。つまり、〈史料二〉は、紀氏・大伴氏という蘇我氏と極めて近い勢力によって、行われたのである。さらにいえば、東山道ルートでまず毛野へ進出した物部氏に対し、蘇我氏は、紀伊から海沿いに東海道ルートで関東・東北を目指したのではないか。馬子は、大王墓の墳形を中国の思想に倣い、それまでの前方後円墳から方墳へと変形させるが、そうした蘇我氏の影響の濃い方墳が、七世紀前半、関東でも造られ出す。なかでも、太平洋を望む房総半島に営まれた千葉県栄町岩屋古墳は、一辺七十九メートルという関東最大級の方墳で、蘇我氏の関東・東北進出の橋頭堡として築かれた[27]。

これまでも、六世紀前半に後退した倭王権の東北進出は、六世紀後半がターニングポイントとなり、再び活性化を始めると指摘されてきた[28]。とくに、〈史料二〉や陸奥国牡鹿郡の首長が上総国武射郡を指すとみられる「武射臣」を賜姓されている記事（後掲〈史料四〉）に着目して、紀伊の海上勢力が、房総半島を経由しつつ、北上川河口の牡鹿郡にまで影響を及ぼしていたという興味深い見解もある[29]。当該期、王権の有力層は、仏教受容・王位継承などの重要課題をめぐって対立・分裂を繰り返していた。〈史料一〉〈史料二〉は、抗争の渦中にいた蘇我氏と物部氏が東北へ勢力を伸張させようとしていたことを暗示する。こうした王権内の政争が、東北の社会・文化に大きな影響を与えたこと

は確実であろう。

二、蘇我蝦夷と東北
―『日本書紀』に残らなかった東北経営

七世紀前半、関東では、岩屋古墳に次ぐ一辺六十メートル規模の前橋市宝塔山古墳が造られ、房総半島とともに、毛野でも方墳が優勢になる。[30] 北武蔵の埼玉県行田市戸場口山古墳も方墳で、榛名山二ツ岩軽石を使用した横穴式石室をもつという。従って、海上ルートで関東への地盤を築いた蘇我氏は、房総半島を足がかりに、徐々に東山道の毛野などへも触手を伸ばしたのである。上野国甘楽郡には宗伎郷があり（『倭名類聚抄』）、この郷名から宗宜（蘇我）部が置かれたことが推測される。[31] こうした蘇我部の分布は、関東に止まらず、東北へも拡がっていく。

〈史料三〉多賀城跡第44次調査出土木簡
「宗何
「宗何

〈史料三〉は、多賀城の外郭中央南部の調査の際に出土したもので、右上に合点が入れられている。宗何の下には「部」という文字が書かれていた蓋然性が高い。[32] 八世紀後半から九世紀前半の年代が与えられている。多賀城は、八世紀前半、「蝦夷」支配の強化を図った古代国家が新たに築いた城柵で、陸奥国の行政・軍事を掌る国府もここに置かれた。下部が欠損しているため、全容は明らかにならないのが惜しまれるが、〈史料三〉は、陸奥国府が国内に居住した宗何部（蘇我部）を管理・掌握した帳簿あるいは戸籍のようなものであろうか。さらに、多賀城跡出土第11号漆紙文書にも、宗何部真縄の名がみえる。[33] この宗何部の出自・淵源が問われるが、七世紀前半、東北へ赴いた蘇我氏あるいは配下の蘇我部が、在地の人々を蘇我部に編入し、王権への奉仕を義務づけたか、あるいは、〈史料二〉の大伴部の例のように、関東以南から東北へ遠征し、そのまま土着したか、どちらかが想定される。

〈史料四〉『続日本紀』神護景雲三年三月辛巳条
陸奥国白河郡人外正七位上丈部子老・賀美郡人丈部国益・標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜二姓阿倍陸奥臣一。安積郡人外従七位下丈部直継足阿倍安積臣、信夫郡人外正六位上丈部大庭等阿倍信夫臣、柴田郡人外正六位上丈部嶋足安倍柴田臣、会津郡人外正八位下

丈部庭虫等二人阿倍会津臣、磐城郡人外正六位上丈部山際於保磐城臣、牡鹿郡人外正八位下春日部奥麻呂等三人武射臣、〔亘理郡人外従宗何部池守等三人湯坐亘理〕連、白河郡人外正七位下靫大伴部継人・黒川郡人靫大伴部弟虫等八人靫大伴連、行方郡人外正六位下大伴部三田等四人大伴行方連、苅田郡人外正六位上大伴部人足大伴苅田臣、柴田郡人外従八位下大伴部福麻呂大伴柴田臣、磐瀬郡人外正六位上吉弥侯部人上磐瀬朝臣。宇多郡人外正六位下吉弥侯部文知上毛野陸奥公、名取郡人外正七位下吉弥侯部老人・賀美郡人外正七位下吉弥侯部大成九人上毛野名取朝臣、信夫郡人外従八位下吉弥侯部足山守等七人上毛野鍬山公、新田郡人外大初位上吉弥侯部豊庭上毛野中村公、信夫郡人外少初位上吉弥侯部広国下毛野静戸公、玉造郡人外正七位上吉弥侯部念丸等七人下毛野俯見公。並是大国造道嶋宿祢嶋足之所レ請也。

そこで、八世紀後半、道嶋嶋足が一括賜姓を申請した陸奥国の首長層のなかにも、「亘理郡人宗何部池守」という名がみえることに着目したい。道嶋嶋足は、陸奥国牡鹿郡から都へ出仕し、授刀衛・近衛府の役人として藤原仲麻呂の乱の鎮圧に大活躍し、道鏡政権において陸奥守を上回る官位を獲得するなど、異例の大出世を遂げた人物である（『続日本紀』延暦二年（七八三）正月乙酉条）。〈史料四〉では、「武射臣」を例外として、陸奥国の郡・郷名の冠した姓を賜姓されており[34]、嶋足と陸奥国の首長層との結びつきを物語る。このときに、与えられた姓をみると、北日本海を北航した阿倍氏や古来より王権の東北政策を引っ張った上毛野氏、〈史料二〉にも出てくる大伴氏の姿が垣間見える。彼らは、道嶋氏が一翼を担った八世紀後半の征夷において台頭した新興の首長層で、これらの中央氏族との系譜関係を明示し、国家側から承認されることを通して、在地社会における自らの地位を向上させたといわれる[35]。さらに〈史料四〉を注視すると、前半は丈部・春日部・宗何部・大伴部、後半は吉弥侯部といった姓をもつ人物に対する賜姓であったことがわかる。すなわち、前半の姓は、関東以南に多く分布する部民と共通するものでもあった。後半の吉弥侯部は、一般に、部民制的な人間関係が辿れない者を戸籍に編成する際に創出されたもの[36]で、東北においては、もともと「蝦夷」と把握された在地の首長層が、王権・国家の側に付き、軍事・労役を果たすなど、俘囚となったときに与えられるケースの多い姓である。宗何部池守に与え

られた「湯坐」氏は、陸奥国南部の菊多郡に多く分布し（『類聚国史』巻九十九　職官四　叙位四　天長九年（八三二）四月癸未条、『日本三代実録』貞観十二年（八七〇）六月二日条）、遡って、道奥菊多国造は湯坐連と同祖関係を有していた。[37] また、常陸国の中心部・茨城郡にあたる地域をかつて勢力圏にした茨木国造の祖・多祁許呂命の男の筑波使主が、湯坐連の初祖にあたるという伝承もある（『常陸国風土記』茨城郡条）。さらに、上総国天羽郡の宗我部虫麻呂という人物の存在から（『続日本紀』宝亀三年（七七二）七月辛丑条）、陸奥と上総の蘇我部が密接な関係をもったことを指摘する見解もある。[38] おそらく、池守の祖先は、常陸または上総からの移住者で、上総あたりの蘇我部を通して、王権を掌る蘇我氏とも何らかのつながりをもっていたのであろう。

このように〈史料三〉〈史料四〉を分析すると、陸奥国の南部には、上総や常陸といった関東の太平洋側から移住した蘇我部が存在したことが確かめられる。そもそも、部とは、王権の大王・王族や有力豪族に属し、労役を提供したり、様々な生産物を貢納したりする集団のことであった。およそ六世紀後半から七世紀前半にかけて、本宮町高木遺跡群や桑折町沖船場遺跡群など、現在の福島県域でも関東とくに常陸南部に系譜をもつ土師器が多く出土する集落遺跡が営まれ、関東から陸奥南部への移住があったことが推測されている。[39] さらに、北へ歩を進めると、仙台市長町駅東遺跡では、大溝に区画された内部の住居跡から常陸南部や上総に類例をもつ鬼高系土師器が出土し、移住者の拠点集落であったともいわれる。[40] やがて、この近傍には、政庁・儀礼空間・寺院などの大規模な遺構が検出され、多賀城以前の陸奥国府に比定されている仙台市郡山遺跡が出現する。はじめにでも述べたように、関東の土師器を主体とする集落遺跡はのちの柵戸・鎮兵に相当する移住者の集落で、王権・国家の軍事・交易を媒体とした「蝦夷」支配に重要な役割を果たしたという指摘もある。[41] これをふまえると、陸奥国の蘇我部は、関東からの移住者のなかに存在し、王権の中枢にいた蘇我氏から伝達された指示のもと、城柵官衙造営のために労働力を提供したり、特産物の収集・貢納にあたったりするなど、軍事・経済の両面から東北経営をサポートしていたのではないか。むろん、様々な物資の運搬・輸送、人の移動などに、船は不可欠である。中央の蘇我氏のバックアップのもと、蘇我部は、〈史料二〉のような紀伊から房総半島を介して太平洋沿岸を北へ向かう水軍に乗り、東北を訪れたのではあるまいか。そのうえ、七

世紀代に形成された城柵官衙へと発展していく遺跡群は、仙台平野にとどまらず、東松島市赤井遺跡（牡鹿柵）・大崎市名生館遺跡（玉造柵）など、牡鹿半島や大崎平野まで広がっていく。この地は、まさに王権・国家が一大開発を行ったのちの天平産金の中心地であった。〈史料四〉の立役者・道嶋嶋足は、陸奥国牡鹿郡・小田郡あたりに基盤をもった首長・丸子氏の出身で、丸子連宮麻呂という人物が天平産金の担い手の一人として登場する。嶋足の躍進の背後に、嶋足と陸奥国を結ぶ産金ネットワークがあったことは、想像に難くない。[42] しかも、彼を輩出した丸子氏は、もともと上総からの移住者であった。[43] そうだとすれば、陸奥国の蘇我部と丸子氏は、どちらも上総からの移住者で、陸奥国へ移住した背景に、蘇我氏から金鉱開発の密命を受けていた可能性すら浮上する。蘇我部は、陸奥南部にとどまらず、大崎平野・牡鹿半島といった当時の東北経営の最前線にまで、分布したとも憶測されよう。

ところで、〈史料四〉の宗何（蘇我）部池守の地盤の亘理郡は、太平洋沿岸に位置し、多賀城手前の海上ルートの重要な場所に位置する。そのうえ、やや時期は下るが、阿武隈川を挟んで亘理郡と近接する名取郡は、多賀城跡出土の漆紙文書から玉前剗が置かれたことが明らかになるなど、陸奥国府へ向けて北上する海道と山道の結節点であった。[44] 要するに、古来、亘理周辺は北へ歩みを進める人々にとって交通の要衝であり、ここを抑えることによって蘇我氏は、海道のみではなく、山道への勢力伸張も企てたのであろう。ただし、前述のように、東北の山道は、上毛野氏の撤退以降、物部氏の影響を色濃く感じさせる地域であった。中央においては、すでに用明二年（五八七）、蘇我・物部の争いは、馬子が守屋を下したことによって決着が付いていた。蘇我氏は、中央での争いを制したのち、太平洋沿いに関東・東北へ向かい、そののち、物部氏とのつながりが強い山道へも歩みを進めたのである。ここに、いわば、舞台を関東・東北へ移した蘇我・物部対決の第二ラウンドが始まったと捉えられよう。

そこで、興味深いのは、蘇我蝦夷の母が、物部守屋の妹ということである。蘇我蝦夷は、「稲目―馬子」から続く蘇我本宗家・三代目の当主で、舒明朝から皇極朝にかけての王権屈指の実力者であった。その子どもの入鹿は、祖母である物部守屋の妹の邸宅に住んでいたことから、「物部大臣」ともいわれている。[45] つまり、物部氏の財産は、守屋の妹であった蘇我蝦夷の母を介して、蝦夷から入鹿へと受け継がれたのである。[46] この彼らが継承した物部氏の財産の

なかに、関東から東北の山道ネットワークがあったとは考えられないか。憶測を深めれば、蘇我氏は、物部氏の財産を継承した、蝦夷・入鹿の全盛期までに、関東・東北の山道へも食い込んでいたのであろう。いずれにしても、〈史料三〉〈史料四〉の宗何（蘇我）部の姿は、王権で権力を握った蘇我氏が、関東からさらに足を伸ばし、太平洋沿いに東北へも勢力を拡大させたことを明らかにしている。こうして、『日本書紀』にみられない、七世紀前半の太平洋側の東北経営は、蘇我氏を中心に実施されたことが浮かび上がる。

〈史料五〉『日本書紀』皇極元年（六四二）十月丁酉条

蘇我大臣、設二蝦夷於家一、而躬慰問。

しかも、蘇我氏と東北との結びつきは、蘇我氏の側からの一方的なベクトルに止まらない。〈史料五〉は、蘇我大臣（蝦夷）が、東北から上京した「蝦夷」を私邸に招き、饗宴を催している様子を記す。そうした王権の実力者と日本列島の周辺の勢力との外交・交流は、大化前代では一般的であり、蘇我蝦夷は百済使から直接貢物を送られていたことが知られ（『日本書紀』皇極二年（六四三）七月辛亥条）、八世紀以降も長屋王が渤海使を邸宅に招いている例などがあり、[47]「大臣外交」などとも指摘される。[48]〈史料五〉は、蘇我氏が「蝦夷」に対して行った「大臣外交」の一端と理解でき、蘇我氏と現地住民「蝦夷」の首長層との深いパイプを示唆する。もちろん、このときに、蘇我蝦夷は、彼らを饗応するとともに、上京の際に携えてきた特産物を入手したことであろう。従って、蘇我氏と東北との関係は、双方向的なものであったと看取できる。蘇我蝦夷・入鹿は、東国から五十人の兵士を招集し、甘樫丘にあった邸宅の護衛にあたらせていた（『日本書紀』皇極三年（六四四）十一月条）。東国から五十人の兵士の出自は「蝦夷」であったという推測もある。[49]屋上屋を重ねると、当時の倭王権の実力者・蘇我蝦夷が、なぜ、こののち辺境の異民族として、征討・差別の対象となる「蝦夷」と同じ名をもつのか、定見はない。ここでは、一つの可能性として、蘇我氏が東北への意欲をむき出しにしていたことや「蝦夷」との深いパイプがあったことを考慮し、蘇我蝦夷は王権の東北経営を体現する存在として認知されていたために、蝦夷という名をもったとしてみたい。

そのうえ、七世紀から八世紀にかけて、末期古墳といわれる小円墳群は、北奥羽の太平洋側を北上し、現在の八戸

市やおいらせ町付近へと到達する。これらの古墳群は関東のいわゆる終末期古墳とも類似する。そのなかには、八戸市丹後平古墳など七世紀前半に遡るものがあり、北日本海を北上した阿倍比羅夫よりも前に、蘇我氏の影響のもと、関東を起点として、太平洋側においても北航が行われたことを窺わせる。とするならば、蘇我蝦夷が饗応した〈史料五〉の「蝦夷」には、仙台・大崎平野または北奥羽の太平洋側などの首長層が含まれていたのではないか。ただし、〈史料五〉の直前、「越辺蝦夷」の服属が伝わっている（『日本書紀』皇極元年九月癸酉条）。むろん、倭王権による北日本海の本格的な開発が進展したのは、蝦夷・入鹿が倒れたのちの大化改新以降であるが、〈史料五〉では、蘇我蝦夷のもとに、太平洋側と日本海側の双方の「蝦夷」が集ったとも考えられる。ともあれ、ここで謎として浮き彫りになるのが、太平洋側における七世紀前半の東北政策が、『日本書紀』などの文献史料に残っていないことである。

そこで、東北より北の世界の動きと倭王権との関係に目を向けてみたい。五世紀代に北海道から南下して北奥羽の各地で出土した続縄文文化の北大Ⅰ式土器が、六・七世紀の北大Ⅱ・Ⅲ式になると、ほとんどみられなくなる。続縄文人の南下が弱まったかにみえるが、反面、サハリンから道北を席巻した粛慎すなわちオホーツク人は、道南の奥尻島に拠点を構え、倭王権と直接の関係を持とうとする。道央・道南の続縄文人の要請を受けた王権は、斉明四年（六五八）から六年（六六〇）の三年間にわたり、阿倍比羅夫を先頭とした大船団を北日本海へ派遣、オホーツク人の割拠する奥尻島を叩き、北方交易の安定化を図る。[50] 比羅夫の遠征やその前段階に行われた越の渟足柵・磐舟柵の造営など、当該期の北日本海での出来事は、『日本書紀』にも詳細に掲載されている。比羅夫の船団には、北奥羽の太平洋側の集団と想定される陸奥「蝦夷」も乗船し、道央低地帯へと移住・土着していく。[51] この結果、道央・道南の続縄文文化は、住居形態・生活用具など本州の農耕文化の色彩の濃い擦文文化へと変容し、道北・道東へ退いたオホーツク文化と対峙する。六世紀後半以降、物部氏・蘇我氏によって再開された北方探査は、大化改新以降も引き継がれ、七世紀中葉には比羅夫の北航という形で北海道にまで及んだのである。そして、比羅夫に協力した陸奥「蝦夷」こそ、蘇我氏のインパクトにより、王権とかかわりをもった太平洋側の集団だったのではないか。しかも、北奥羽の太平洋側には、昆布・琥珀・漆などの豊富な資源があり、王権の支配者層は、八世紀以前から多くの関心を寄せていた。と

くに、三陸沿岸の昆布は、閉村の「蝦夷」が「先祖代々」貢納していたものであった（『続日本紀』霊亀元年（七一五）十月丁丑条）。蘇我氏を含めた武内宿禰を共通の祖先とする氏族は、服属儀礼に用いる食膳奉仕に従事しており、[52]閉村の「蝦夷」は、蘇我氏の進出以来、特産物・昆布の貢納を通して、王権と関係をもったのかもしれない。しかも、閉村の「蝦夷」の姓名は「須賀君古麻比留」であった。蘇我氏の本拠・大和宗我は、『万葉集』巻十二―三〇八七番に「真菅よし　宗我の河原に　鳴く千鳥・・・」と詠まれている。ソガと類音のため枕詞に用いられた菅（スガ）は、水辺に繁茂する植物のことである。つまり、宗我川の畔には、美しい菅が繁茂しており、大和宗我の地名は、菅に由来すると考えられる。[53]また、馬子は、河内の石川に「石川の宅」を営み（『日本書紀』敏達十三年（五八四）条）、こののち大化改新のキーパーソンの一人・蘇我倉山田石川麻呂（倉麻呂）を輩出する蘇我倉家を創出していた。[54]この河内石川は、もともとイシカ・イスカと呼ばれ、延喜式内社の壱須何神社があり（『延喜式』神名帳）、現在も大阪府南河内郡河内町に「一須賀」の地名がみえる。[55]「須賀君」と「一須賀」の「スガ」という読みの奇妙な一致は、蘇我氏のもと河内石川あたりから、昆布を獲得するために遠征した勢力が存在したことを疑いたくなる。「須賀君」については、「須賀＝和語のすか＝砂浜」とし、昆布の乾場に由来する地名・ウジ名とする見解[56]や古麻比留という名をもつことから「古麻＝高麗」とし、高句麗系の渡来人という見方[57]が出されているが、ここでは、大和宗我の地名の由縁や河内石川に基盤をもつ蘇我一族との絡みなど、蘇我氏の東北の太平洋側への進出と関わって付けられた姓と理解したい。ともかく、比羅夫の遠征のときに登場する陸奥「蝦夷」や長年昆布を貢納していたという閉村の「蝦夷」は、七世紀前半の蘇我氏による太平洋側の北航を垣間見せる集団なのである。なお、比羅夫に同行した陸奥「蝦夷」は、道南・噴火湾一帯の昆布資源を目の当たりにし、道南へ移住・土着して、資源の開発にあたったことさえも指摘される。[58]東北太平洋側と北海道を結ぶ交通は、北海道富良野市西達布の東京大学北海道演習林内の山頂で、六世紀後半の完形の須恵器「はそう」が見つかっており、[59]道南にとどまらず、道央から胆振日高まで伸びていた可能性もある。

これまでも、『日本書紀』の蘇我氏に関する記述には、蝦夷・入鹿を打倒し、古代国家への道を突き進んだ大化改新以降の王権が、彼らの業績に対して批判的な眼差しを向けたため、王権簒奪を企てていたことを虚構するなど、お

おむね辛いものが多いと、とみに指摘されてきた。[60] 従って、蘇我氏と密接にかかわる七世紀前半の太平洋側の東北経営が『日本書紀』の記録に残らなかったのは、むしろ自然な流れとみるべきであろう。

近年、大山誠一氏は、「聖徳太子虚構説」を提唱し、『日本書紀』における聖徳太子の活躍の記述は、蘇我馬子の業績をすり替えたもので、おおむね八世紀前半、時の権力者・藤原不比等の意向を受けた入唐僧・道慈の手によって、ねつ造されたものであることを主張している。[61] 漢文学の立場から『日本書紀』編修過程の解明に取り組む森博達氏も、その中心人物を不比等としている。[62] むろん、「聖徳太子虚構説」の当否については、筆者の力量を越えており、本稿で踏み込むべき課題ではない。ここでは、大山氏の見解のうち、不比等は、奈良朝初期の複雑な皇位継承のなかで皇太子の首皇子（のちの聖武天皇）の即位を望んでいたこと、そのために施した画策の一つに『日本書紀』のなかで中大兄皇子の地位を皇太子と位置づけ皇位継承にあたり皇太子の地位を強調したこと、そのうえで中大兄皇子をモデルに聖徳太子を皇太子として『日本書紀』に描いたとしたことが興味深い。[63] すなわち、不比等は、首皇子の即位を現実のものにするために、「聖徳太子―中大兄皇子―首皇子」の皇太子ラインを『日本書紀』によって、意図的に創りあげたのであろう。『日本書紀』編纂の前夜、古代国家の東北経営は、按察使・上毛野広人が殺害されるなど、征夷への大規模な抵抗がみられるなか、多賀城創建に至る大きな山場を迎えており、[64] これを乗り越えることは、首皇子の事績を積むうえでも重要視されたはずである。もちろん、七世紀前半の東北経営の中心に聖徳太子がいたならば、『日本書紀』に語られてしかるべきである。しかしながら、『日本書紀』は、聖徳太子と東北の関係に一切触れておらず、聖徳太子が東北経営を直接指揮しなかったことは事実であろう。それに対して、中大兄皇子は、渟足柵・磐舟柵の設置、阿倍比羅夫の北航など、のちの征夷へとつながる政策を施している。こうした北日本海の政策は、『日本書紀』に詳細に記載されている。要するに、『日本書紀』は、城柵の設置・征討軍の派遣といった征夷へ至る東北経営の出発点を、中大兄皇子のもと行われた大化改新以降の北日本海における政策と位置づけたのである。

ところで、ここで今一度留意されるのが、「聖徳太子虚構説」である。大山説に反するかのように、『日本書紀』では、こと東北経営については、聖徳太子の事績と絡めて取り上げなかった。仮に『日本書紀』が「聖徳太子―中大

兄皇子―首皇子」ラインを強調したのならば、なぜ、東北経営を聖徳太子まで遡らせ、蘇我氏の業績からすり替え、「虚構」しなかったのであろうか。そこで、『日本書紀』は、中大兄とともに大化改新をけん引した、不比等の父の中臣鎌足の功績を称え、最大限の評価を下していることに注意したい。[65] つまり、不比等にとって、中大兄と鎌足のツートップで実際に行われた大化改新以降の北日本海の政策こそ、『日本書紀』に記す古代国家の東北経営の出発点にふさわしかったのである。聖徳太子ではなく、大化改新が東北経営のスタートとされたのは、このためであろう。

それに加えて、大化改新以降、蘇我氏の手から王権・国家へと受け継がれた東北の金鉱開発は、八世紀前半、征夷と結びつきつつ、いよいよ佳境を迎えていた。[66] こうした砂金の採取などの産金活動は、古今東西、産地が知られないように極秘に行われるのであった。[67] 蘇我氏をはじめとする王権・国家の有力層にとっても同様に、情報漏れに留意しつつ、金鉱開発を行う必然性があった。秘密裏の産金活動と密接に関わっていたことも、『日本書紀』に太平洋側の東北経営の記載がない要因の一つであろう。このことは、いかに東北の金資源の安定的確保が困難であったかを物語る。不比等は、蘇我氏の東北経営を『日本書紀』から外し、東北の金探査から発見・安定的確保の実現という最大級の出来事を、首皇子の手柄にすることによって、権力を安定させようと目論んでいたのではないか。こののち彼の構想は、聖武天皇が天平二十一年（七四九）陸奥国小田郡での産金の実現を高らかに宣言したことによって、結実する。

なお、延喜十七年（九一七）の成立といわれる『聖徳太子伝暦』には、〈史料一〉の「蝦夷」綾糟の服属についても、聖徳太子の事績として描かれている。聖徳太子は、敏達天皇（大王）に対して、殺生を加えず、王化の徳による懐柔を進言したという。[68]『聖徳太子伝暦』は、『日本書紀』などの文献史料をもとにしつつも、聖徳太子在世中の事柄のおおよそ全てを、聖徳太子との関連の出来事にすり替えている。[69] そのなかでもとくに、聖徳太子と「蝦夷」の服属を絡めたストーリーは、九世紀後半から十世紀前半にかけて、元慶の乱をはじめとした「蝦夷」の反乱が続発しており、平安貴族たちの現実的脅威を反映したものとの見方もある。[70] いずれにしても、藤原不比等ら八世紀前半の権力者の手によって『日本書紀』で抹殺された蘇我氏の東北経営は、時期が下って、平安貴族の脳裏には、聖徳太子の事績へと改編されて焼き付けられていったのであろう。

三、蘇我系官人と征夷

このように、七世紀前半における東北太平洋側、のちの陸奥国への進出・開発を蘇我氏が主導したとすると、その目前に牡鹿半島や大崎平野という天平産金の中心地が迫っていることがひときわ目立つ。天平産金は、陸奥守・百済敬福を筆頭とした、多くの渡来系の人々が立役者となり、実現している。つまり、古代国家は、征夷のなかに産金活動を組み込み、要所に渡来人を配置したのであった。遡って、仏教政策に尽力した蘇我氏は、当時の王権のなかで抜きん出て深く、渡来系集団とのかかわりをもっていた。とくに、坂上田村麻呂の祖先にあたる東漢氏との関係は注目に値する。東漢氏は、四世紀後半、中国南朝から朝鮮半島経由で渡来した阿知使主を祖とし、大和檜隈に定着したのち、百済などからの多くの技術者の招聘・統括に尽力した[71]。彼らは、もともと葛城氏に属し、五世紀後半の葛城氏滅亡ののち、蘇我氏の管理下に置かれ、飛鳥開発・寺院造営などに片腕となって働いた[72]。そして、法興寺を建立するにあたり、百済から招聘した寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工などの監督役に任命されている（『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』）。また、物部守屋誅殺ののち、崇峻大王と対立した馬子は、「東国調」が貢上されると偽って崇峻をおびき寄せ、東漢駒を実行犯に殺害する（『日本書紀』崇峻五年（五九二）十一月乙巳条）。おそらく、大王暗殺という一大事は、馬子と駒の間で極秘に事を運んだ結果、実行されたのであろう。この点からも、蘇我氏と東漢氏の親密な関係がわかる。そのうえ、東漢氏が法興寺の建設など、仏教政策に貢献したならば、様々な仏教関連品を作製するために、金を求め探したことは想像に難くない。つまり、蘇我氏の台頭と東漢系の渡来人の活躍は不可分の関係であり、金などの資源に関して豊富な知識をもつ彼らは、東北進出にあたっても、ブレーンの役割を果たしたのではないか。さらにいえば、蘇我氏は、東漢系の渡来人を活用して、東北進出と仏教政策を連動させることによって、王権内の権力をより強固なものにしようとしたといえよう。

しかも、こうした蘇我系人脈を使った東北経営・金鉱開発は、大化改新以降、いわゆる征夷の段階でも継続する。

〈史料六〉『続日本紀』大宝元年（七〇一）三月戊子条

遣二追大肆凡海宿祢麁鎌于陸奥一冶レ金。

八世紀初頭、古代国家は凡海（忍海）麁鎌を冶金のため

陸奥国へ派遣している。忍海氏は、海部を掌握し、海産物の貢上を掌る氏族であるが、[73]遡れば蘇我氏の発展の基盤となる葛城地域の倉を管轄していた。[74]『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』が引く「塔露盤銘」には、丙辰年（推古四年（五九六））に完成した露盤について、「作金を使せる人等は、意奴弥首、名は辰星なり」とある。意奴弥（おぬみ）は忍海を指すと考えられる。[75]また、大宝元年（七〇一）、対馬嶋へ派遣された大和国忍海郡の三田首五瀬は、冶金に成功したことを報告している（（『続日本紀』大宝元年八月丁未条）。ただし、この報告は、五瀬の詐偽としてのちに発覚）。むろん、五瀬の出身地の大和国忍海郡は、忍海氏の本拠である。忍海郡の付近は、『日本書紀』の伝承のなかに、葛城襲津彦が朝鮮半島から連れ帰った捕虜を集住させた「四つの邑」の一つにあたり（『日本書紀』神功摂政五年三月条）、この地を本拠にした葛城氏の保護のもと、古くから渡来人の集落が営まれていた。[76]忍海氏は、四世紀後半あたりから、葛城氏に属した渡来系の集団で、鍛冶などの金属技能を活かした手工業生産に秀でていた。[77]奈良県葛城市寺口忍海古墳群は、五世紀後半から七世紀前半までの間に二百基程度営まれた径十メートル前後の円墳群であるが、石室に北部九州や百済・加耶に多い竪穴系横口式石室が採用されていることや副葬品に鍛冶具や鉄滓がみられること、付近の脇田遺跡で大規模な鍛冶生産集団の墳墓との関連が指摘されていることから、渡来系の鍛冶生産集団の墳墓との関連が指摘されている。[78]忍海氏は、東漢氏と同様、葛城氏の滅亡ののち蘇我氏の配下となり、金属技術を武器に活躍していた。蘇我氏と密接なかかわりをもった渡来系の集団のなかでも、かなり詳しい金に関する知識を有していたのである。おそらく、産金の意欲が一段と高まった七世紀後半から八世紀前半の律令制国家の成立期、東北にも盛んに赴き、積極的に金探査を行っていたのであろう。

そして、多賀城市山王遺跡では、八世紀後半から九世紀前半とされる須恵器の底部外面に「□［忍ヵ］海」と記された墨書土器が発見されている。[79]山王遺跡は陸奥国府の多賀城近傍に営まれた国司館と推定され、忍海を忍海氏とすると、忍海氏は八世紀初頭のみならず、それ以降も、陸奥国司と密接にかかわりをもちつつ、国府へ滞在していたのであろう。まさに、その時期は、気仙・胆沢という産金地を標的とした征夷の期間であり、墨書土器は、国司のもとで産金作業に従事する忍海氏を饗応するために用いられたのではないか。要するに、忍海氏は、蘇我蝦夷・入鹿が倒されたのちも、技能を活かし、王権・国家のなかで役割を

果たし、征夷と連動した産金活動に参画していたのである。

さらに、八世紀後半から九世紀初頭に東北へ派遣された官人には、蘇我一族の後裔となる石川氏、かつて蘇我一派と目された紀氏、蘇我氏と最も親密だった渡来系・東漢氏を先祖にもつ坂上氏の人物が多く任命されている。[80] そもそも、蘇我氏は、蝦夷・入鹿の憤死後も、倉山田石川麻呂の子孫たちが王権内で一定の地位を占め、七世紀中葉から後半の政局のキーパーソンになっていた。[81] 道嶋氏の権勢のもと、陸奥国内で活発に産金の行われた八世紀後半、鎮守将軍や陸奥守を歴任した石川名足の祖は、壬申の乱の功臣・蘇我安麻呂で、安麻呂は、倉山田石川麻呂の子・連子の息子であった。そして、伊治呰麻呂の乱の際、焼き討ちされた陸奥国府・多賀城を捨てて逃亡した国司の一人に、陸奥掾・石川浄足が出てくる（『続日本紀』宝亀十一年（七八〇）三月丁亥条）。このとき、呰麻呂の標的となったのは、陸奥守・紀広純と牡鹿郡大領・道嶋大楯であり、宝亀年間の征夷が紀伊から三陸最南端の牡鹿郡を結ぶ太平洋沿岸の人脈によって実施されていたことが知られる。まさに、〈史料二〉の紀伊出身の大伴部押人の先祖が同行した東北進出を彷彿とさせる。さらに、坂上氏と道嶋氏とのつながりも目を見張り、道嶋嶋足の都での躍進の基盤を築いた近衛府時代の上司は、坂上苅田麻呂であった（『続日本紀』天平宝字八年（七六四）九月乙巳条）。後年、苅田麻呂は鎮守将軍として陸奥に赴任する（『続日本紀』宝亀元年（七七〇）九月乙亥条）。その子こそ、征夷大将軍として大車輪の働きをした田村麻呂であり、彼のブレーンの一人に道嶋御楯の名がみえる（『日本後紀』延暦二十三年（八〇四）正月甲辰条）。繰り返すように、道嶋氏は、その出身地の上総で蘇我部と結びついていた。いずれにしても、古代国家の征夷に対して、いよいよ「蝦夷」たちの抵抗が激しくなった時期、陸奥国司や鎮守・征夷将軍などには、かつて蘇我氏と極めて近かった氏族の人物が任命されていたのである。まさにこのころ、陸奥国では、道嶋氏を中心とした産金体制が確立され、気仙・胆沢という二大金埋蔵地をターゲットとした征夷が始まっていた。呰麻呂の乱も、そうした征夷と産金への地元の反発によるものであった。[82] とすれば、かつて王権で最も金への意欲をもった蘇我氏の流れを汲む国司たちは、産金活動と関わって陸奥国へと派遣された蓋然性が浮上してこよう。都から派遣された国司の周りには、関東などから送り込まれた柵戸・鎮兵が居住し、城柵官衙の運営など「蝦夷」支配の一翼を担った。出羽国の例になるが、河辺郡百姓・奈良己智豊継の先祖は百済か

らの渡来人であった[83]（『続日本後紀』承和十年（八四三）十二月条）。関東にも、多くの渡来人が送り込まれ、武蔵国には高麗郡・新羅郡が置かれている。つまり、東北へ移住した人々のなかには、渡来人やもともとの居住地で渡来系の集団と密接にかかわったものがおり、そのなかには金鉱開発に暗躍するものが出てきた。こうして征夷の目的の一つとなった陸奥産金は、渡来系・蘇我系の国司と在地の実力者・道嶋氏の指導のもと、渡来人や関東から移住した技術者が一体となり、実働部隊として柵戸・鎮兵や地元住民「蝦夷」を巻き込みつつ、実現したものであった[84]。想像を逞しくすると、その端緒となったのは、蘇我氏が王権を通じて権力を手中にし、様々な仏教政策を施した六世紀後半から七世紀前半と位置づけられ、八世紀から九世紀前半にかけて、天平産金や気仙・胆沢への征夷を導く金鉱開発も、かつての蘇我系人脈を最大限に活用して行われたと理解できよう。

他方、このような蘇我氏と近しい出自が多い国司たちに比べて、北奥羽の在地の首長層は、なお、物部姓を与えられたり、名乗ったりするケースがみられる。しかも、物部姓をもつ首長層は、征夷の終焉した九世紀以降にまで確認され、古代国家が支えきれず放棄した志波城の故地にまで分布する（『続日本後紀』承和二年（八三五）二月己卯条）。元慶の乱の直後には、「蝦夷訳語」の物部斯波連永野が叙位されている（『日本三代実録』元慶五年（八八一）五月三日条）。さらに、鎮守府胆沢城と三陸沿岸を結ぶ中継点とされる遠野市高瀬Ⅰ遺跡でも、「物」「物部」と記された墨書土器が複数出土している[85]。これらの史資料は、征夷の時期と地域とはやや外れた北奥羽のものである。彼らは、物部氏が毛野を経由して、東北へも影響を及ぼした六世紀前半以降、中央で没落したのちも、長年、つながりを維持してきたのだろうか。そこで、奥州市黒石寺の仏像の胎内銘に、「物部朝□□」「物部哀黒丸」など物部氏の人名が記されていることに注目したい[86]。黒石寺は、鎮守府のもと築かれた古代国家の辺境鎮護の思想を如実に表した寺院で、ここから波及した仏教文化は、在来のカミ観念・アニミズムとも宗教混合し、九世紀以降の北奥羽一帯に広がりをみせる[87]。おそらく、胎内銘の物部氏は地元の首長層で、仏教という新たな宗教の伝播という事態に直面しながらも、新興宗教の受容という葛藤を乗り越えつつ、自らの習俗・観念のなかに混成させていったのであろう。なお、藤原清衡が中尊寺金色堂を建立したおり、造営にかかわった大工のなかに、物部清国という名がみえる（『中尊寺金色堂棟木

墨書銘』天治元年（一一二四））。近年では、平泉仏教は、中国仏教のダイレクトな影響を受けており、当時の東アジアに広がる宗教世界を視野に入れると同時に、在来の信仰世界を破壊・改変することなく繁栄したというダブルスタンダードが指摘されている。[88] つまり、北奥羽の物部氏は、奥州藤原氏の時期に至るまで、北奥羽特有の仏教文化を支え、神仏の習合した宗教儀礼・祭祀に深く携わっていたことが推測される。[89] とすれば、古代国家は、そうした宗教観念をもつ地元の首長層に対して、自らの辺境鎮護とは異なる基層信仰をもつ集団として、物部姓を賜与したとは考えられないか。前に述べたように、六世紀後半の倭王権における「蘇我―物部」対立の一因は、単なる仏教受容の有無ではなく、仏教を含めた祭祀権の全般の掌握をめぐるもので、結果として、対立を制した蘇我氏がその実権を握った。むろん、当初、蘇我氏が中心にいた仏教政策は、大化改新以降の王権・国家にも受け継がれ、蘇我系官人を通して、東北へも辺境鎮護という形態で拡がっていく。しかしながら、北奥羽には、そうした辺境鎮護の思想のみならず、平安時代後期までの長期間、基層信仰と宗教混合した観念が残っていたのである。この独特の信仰に基づく祭祀権を握っていたのが物部氏であったと理解できる。とするならば、こうした宗教観念の醸成の過程で、彼らの記憶のなかに、自らの先祖たちが、物部氏の影響を受けていたことが蘇ってきたことも想定されよう。さらにいえば、仏教受容をめぐり激しい葛藤を抱いた首長層にとって、物部姓をもつことは、北奥羽の在地社会のなかで一定のステータスと成り得たのではないか。おそらく、彼らのような物部姓をもつ首長層に連なる集団こそ、在地に出自をもつ「蝦夷」と呼ばれた人々の後裔の一つであろう。

そして、この九世紀以降の物部氏が根付く北奥羽こそ、日本列島のみならず東アジア屈指の産金地であった。平安時代、陸奥守や鎮守府将軍から納められた金は、大宰府における対外貿易の決済に用いられており、平安貴族はこぞって陸奥の金を追い求めた。確かに、およそ九世紀代の陸奥国司には、田村麻呂の系統を引く坂上氏の人物が多く任命されており、[90] 依然として、古代国家は蘇我系官人を通して、産金活動へのアプローチをしていたことは否めない。しかし、なお地元の習俗を生活文化に深く刻む物部氏の浸透は、古代国家が金資源を入手するためには、在地社会と折り合いをつける必要性に迫られていたことを示唆する。要するに、北奥羽では、九世紀以降も、「蘇我―物部」という二大勢力の姿を彷彿とさせる対立が存在し、都から派

遣される坂上氏のような蘇我系の官人と在地の信仰世界を保持する物部系の「蝦夷」との間で、様々な攻防が繰り広げられていたのである。ともあれ、征夷の終焉は、蘇我系人脈を使った東北経営の限界を示すものであった。古代国家の支配者層には、こののち奥州藤原氏の時期に至るまで、豊富な金資源を、物部氏の根付く、北奥羽の「蝦夷」社会から、いかに引き出すかという大きな命題が残されたのである。

おわりに

本稿は、『日本書紀』にみられない七世紀前半の倭王権の太平洋側の東北経営について、考古学の成果を勘案しつつ、残された文献史料と出土文字資料などを紐解くことによって思案した。そこでまず、六世紀後半の「蝦夷」綾糟の服属を発端に、王権内部の蘇我・物部抗争の影響が東北へ及んでいくことを指摘した。そのうえで、抗争を制した蘇我氏が東北へ勢力を伸張させていくさまを明らかにした。

この蘇我・物部抗争は、仏教の祭祀権をめぐる対立ともいわれ、王権の仏教政策を握った蘇我氏は、豊富な金資源をもつ東北への意欲を鮮明にした。蘇我氏は、飛鳥寺の造営などを媒介に、金に関する知識の豊富な渡来人ともつながり、のちの征夷大将軍・田村麻呂を輩出した坂上氏のルーツにあたる東漢氏や葛城氏以来王権と結びついていた忍海氏とも密接な関係をもっていた。そして、七世紀前半以降、太平洋側に宗何（蘇我）部を分布させながら、蘇我蝦夷・入鹿が王権内で権力を確立するころには、太平洋沿岸の海上交通を用いつつ、かなり鋭く切り込み、天平産金の中心地となる牡鹿半島や大崎平野にも迫っていた。しかも、「蝦夷」の抵抗がいよいよ激しくなった八世紀後半の陸奥守など東北に派遣された官人には、かつて蘇我氏と深くかかわった石川氏・紀氏・坂上氏などが任命されており、彼らの活躍と古代国家の征夷・産金が連動する。すなわち、蘇我系人脈を使った金鉱開発は、征夷の段階にも継続していたのである。

以上のように、六世紀後半から七世紀前半の太平洋側の東北経営やそれ以降の征夷・産金を蘇我氏との関係で浮かび上がらせると、このことが『日本書紀』に一切記されていない理由も明らかになる。すなわち、『日本書紀』は蘇我氏の業績に批判的な立場を採っており、蘇我氏の東北経営は意図的に削除されたとみるべきであろう。『日本書紀』は、皇太子・首皇子の即位の正当性を強化するという、八

世紀前半の権力者・藤原不比等の意向を汲んで編纂されており、「聖徳太子―中大兄皇子―首皇子」の皇太子ラインを強く創り上げている。また、不比等の父・中臣鎌足の功績を、最大級に評価している。要するに『日本書紀』は、蘇我蝦夷・入鹿を打倒した中大兄皇子と中臣鎌足の手によって行われた渟足柵・磐舟柵の設置、阿倍比羅夫の北航など大化改新以降の北日本海の政策を、古代国家の東北経営の出発点と位置づけたのである。

ともあれ、いまだ謎多い七世紀前半の太平洋側に展開した倭王権の東北経営は、天平産金へとつながる金鉱開発と無縁でなかったと理解できる。極秘に進められ、『日本書紀』に残らなかった金鉱開発は、蘇我氏が激しい権力闘争を制するために、東北の金資源を独占しようとしたことを暗示する。しかも、東北の金鉱開発は、大化改新以降、聖武天皇が東大寺・廬舎那仏の鍍金に絡んで陸奥産金を高らかに宣言した天平二十一年（七四九）まで、なお百年ほど秘密裏に継続した。このことは、不比等が、産金の実現を首皇子の手柄にし、権力を確立させることを目論んだことを推測させる。すなわち、極秘なことこそかえって、東北の金資源の安定的確保が古代日本の王権・国家の有力層にとって困難であったこと、それが権力掌握のためにいかに重要であったかということを意味しているのである。

註

（1）新井隆一「渡来人と東北―最北の前方後円墳・角塚古墳をめぐって―」未発表

（2）杉山晋作「有銘鉄剣にみえる東国豪族とヤマト王権」（『新版古代の日本⑧関東』角川書店　一九九二年）

（3）篠川賢「日本列島の西と東」（『日本の対外関係1　東アジア世界の成立』吉川弘文館　二〇一〇年）

（4）川原秀夫「上野国古代氏族資料集成」（『明和学園短期大学紀要』一五　二〇〇三年）

（5）加藤謙吉『大和の豪族と渡来人』（吉川弘文館　二〇〇二年）

（6）小田富士雄・坂上康俊「西海道」（『列島の古代史1　古代史の舞台』岩波書店　二〇〇六年）

（7）大川原竜一「国造制の成立とその歴史的背景」『駿台史学』一三七　二〇〇九年

（8）篠川賢前掲註（3）論文

（9）大川原竜一前掲註（7）論文

（10）ただし、毛野では、六世紀中葉から後半に畿内を凌ぐ数の中小規模の前方後円墳が造られている。これらの被葬者の先祖は、前方後円墳に葬られていた蓋然性が高く、毛野

には、王権よりも自らの先祖との紐帯を重視した集団が残存していたのであろうか。物部氏の進出以降も、なお王権との関係が安定しなかったことを物語る。参考ながら、筑紫君磐井の墓と推定される岩戸山古墳も前方後円墳である（八女市教育委員会『岩戸山古墳展示図録』二〇〇九年）。北部九州にも磐井の残党がいた可能性が高い。

（11）亀田修一「渡来人の東国移住と多胡郡建郡の背景」（『多胡碑が語る古代日本と渡来人』吉川弘文館　二〇一二年）

（12）吉村武彦「ヤマト王権と律令制国家の形成」（『列島の古代史8　古代史の流れ』岩波書店　二〇〇六年）

（13）本位田菊士「物部氏と石上神宮」（『古代日本人の信仰と祭祀』大和書房　一九九七年）

（14）亀田修一「陸奥の渡来人（予察）」（『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』二〇〇三年）

（15）門脇禎二「蘇我氏の登場」（『古代を考える　飛鳥』吉川弘文館　一九八七年）

（16）遠山美都男『蘇我氏四代』（ミネルヴァ書房　二〇〇六年）

（17）狩野久「飛鳥寺と斑鳩寺」（前掲註（15）書）

（18）田中史生『越境の古代史―倭と日本をめぐるアジアンネットワーク』（ちくま書房　二〇〇九年）、鈴木靖民「七世紀の倭国仏教と百済・中国北朝」（『倭国史の展開と東アジア』岩波書店　二〇一二年）

（19）新井隆一前掲註（1）論文

（20）岸俊男「紀氏に関する一考察」（『日本古代政治史研究』塙書房　一九六六年）

（21）栄原永遠男「鳴滝遺跡群と倭王権」（『紀伊古代史研究』思文閣出版　二〇〇四年）

（22）薗田香融「古代海上交通と紀伊の水軍」（『日本古代の貴族と地方豪族』塙書房　一九九一年）

（23）前之園亮一「蘇我氏の同族」（『古代を考える　蘇我氏と古代国家』吉川弘文館　一九九一年）

（24）黛弘道「古代国家と蘇我氏」（前掲註（23）書）

（25）白石太一郎・熊谷公男「畿内とその近国」（前掲註（6）書）

（26）加藤謙吉前掲註（5）書

（27）橋本博文・平野卓治「関東」（前掲註（6）書）

（28）蓑島栄紀「倭王権の初期「蝦夷支配」と陸奥」（『古代国家と北方社会』吉川弘文館　二〇〇一年）

（29）平川南「牡鹿地方―川の道・海の道」（『東北「海道」の古代史』岩波書店　二〇一二年）

（30）橋本博文・平野卓治前掲註（27）論文

（31）川原秀夫前掲註（4）論文

（32）『木簡研究』六（一九八四年）、『青森県史』資料編・古代2　出土文字資料　（二〇〇八年）

（33）『青森県史』資料編・古代2（前掲註（32）書）

（34）平川南前掲註（29）論文

（35）熊谷公男「古代東北の豪族」（『新版古代の日本⑨　東北・北海道』角川書店　一九九二年）

（36）伊藤循「「君子部」木簡と俘囚」『日本歴史』八〇三

二〇一五年）

（37）『新日本古典文学大系　続日本紀　四』補注29―六一

（38）『新日本古典文学大系　続日本紀　四』二三四頁　脚注一

（39）菅原祥夫「陸奥南部の国造域における大化前後の在地社会変化と歴史的意義」（『日本考古学』三五　二〇一三年）

（40）長島榮一「官衙からみた関東系土師器」（『古代社会と地域間交流―土師器からみた関東と東北の様相―』六一書房　二〇〇九年）

（41）今泉隆雄「律令国家とエミシ」（前掲（註35）書）、熊谷公男『古代の蝦夷と城柵』（吉川弘文館　二〇〇四年）

（42）新井隆一「陸奥産金と征夷―道嶋（丸子）氏の活躍を通して―」（『法政史学』八〇　二〇一三年）

（43）熊谷公男「道嶋氏の起源とその発展」（『石巻の歴史』第6巻特別史編　一九九二年）

（44）平川南「行方郡―南相馬地域の古代史像」（前掲註（29書）

（45）『日本書紀』皇極二年（六四三）十月壬子条には、入鹿の「弟」を「物部大臣」と称したと解される記載があるが、入鹿に弟がいたことはこの史料以外には確認されず、「弟」はもともと「第」と書かれていたと断定される（遠山美都男『敗者の日本史1　大化改新と蘇我氏』吉川弘文館　二〇一三年）。

（46）遠山美都男前掲註（16）（45）書

（47）酒寄雅志「東北アジアのなかの渤海と日本」（『渤海と古代の日本』校倉書房　二〇〇一年）

（48）佐藤信「古代の「大臣外交」についての一考察」（『境界の日本史』山川出版社　一九九七年）

（49）横田健一「蘇我本宗家の滅亡と大化改新」（前掲註（23）書）

（50）蓑島栄紀「阿倍比羅夫の北航と北東アジア地域」（前掲註（28）書）、瀬川拓郎『アイヌの世界』（講談社選書メチエ　二〇一一年）

（51）新井隆一「北海道式古墳と七・八世紀の太平洋沿岸交通」（『貝塚』六三　二〇〇七年）

（52）前之園亮一前掲註（23）論文

（53）黛弘道前掲註（24）論文

（54）加藤謙吉註（5）書

（55）山尾幸久「蘇我氏の発展」（前掲註（23）書）

（56）蓑島栄紀「古代の「昆布」と北方社会―その実態と生産・交易―」（『環太平洋・アイヌ文化研究』一〇　二〇一三年）

（57）松本建速『蝦夷とは誰か』（同成社　二〇一一年）

（58）蓑島栄紀前掲註（56）論文

（59）杉浦重信「富良野出土のイノシシと須恵器の「はそう」について」（『北方博物館交流』二四　二〇一二年）、瀬川拓郎『アイヌ学入門』（講談社現代新書　二〇一五年）

（60）遠山美都男前掲註（16）（45）書

（61）大山誠一「『日本書紀』の構想」（『聖徳太子の真実』平凡社　二〇一四年）

（62）森博達『日本書紀成立の真実　書き換えの主導者は誰か』

（中央公論社　二〇一一年）。ただし、大山説の「聖徳太子＝道慈創作説」を批判し、著名な憲法十七条などは、新羅留学帰りの還俗者・山田史御方の執筆とする。

(63) 大山誠一『〈聖徳太子〉の誕生』（吉川弘文館　一九九九年）

(64) 鈴木拓也『蝦夷と東北戦争』（吉川弘文館　一九九八年）

(65) 加藤謙吉「藤原不比等と日本書紀」（『日本書紀の読み方』講談社現代選書　二〇〇四年）

(66) 新井隆一前掲註（42）論文

(67) 瀬川拓郎前掲註（59）書

(68) 児島恭子『エミシ・エゾからアイヌへ』（吉川弘文館　二〇〇九年）

(69) 渡辺信和「『聖徳太子伝暦』がつくりあげた太子像」（前掲註（61）書）

(70) 永田一「聖徳太子信仰と蝦夷」（『変貌する聖徳太子』平凡社　二〇一一年）

(71) 坂元義種「渡来系の氏族」（『日本の古代11　ウヂとイエ』中央公論社　一九八七年）

(72) 前川明久「渡来人と蘇我氏」（前掲註（23）書）

(73) 『新日本古典文学大系　続日本紀』一　補注2―三一

(74) 前川明久前掲註（72）論文

(75) 舘野和己「史料に見える葛城の漢人と金属技術者たち」（『奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム　ヤマトの開発史（1）』二〇〇七年）

(76) 葛城市歴史博物館『第十三回特別展　忍海と葛城　渡来人の歩んだ道』（二〇一二年）

(77) 長家理行「古代中小豪族の考察―忍海氏について―」（『日本歴史』二九八　一九七三年）、舘野和己前掲註（75）論文

(78) 新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『寺口忍海古墳群』（一九八八年）

(79) 『青森県史』資料編・古代2（前掲註（32）書）

(80) 『青森県史』資料編・古代1　文献史料「北方史関係官人補任表」（二〇〇一年）

(81) 倉本一宏「蘇我本宗家の滅亡と大化改新」（前掲註（23）書）

(82) 新井隆一前掲註（42）論文

(83) 高橋崇「東北の帰化人分布」（『古代東北と柵戸』吉川弘文館　一九九六年）

(84) 新井隆一前掲註（42）論文

(85) 平川南「岩手県遠野市高瀬Ⅰ遺跡の墨書土器」（『墨書土器の研究』吉川弘文館　二〇〇一年）

(86) 『青森県史』資料編　古代1　文献史料

(87) 新井隆一「奥州天台寺と古代北奥羽の太平洋沿岸交通―漆の交易路に注目して―」（『環太平洋・アイヌ文化研究』一〇　二〇一三年）

(88) 入間田宣夫『藤原清衡　平泉に浄土を創った男の世界戦略』（集英社二〇一四年）。また、菅野成寛氏は、清衡が、当時大宰府の日宋貿易によって、中国の様々な経典・教義を入手していた比叡山山門勢力を招請し、先進的な仏教文物を導入することで、中尊寺を建立したと指摘する（「平安

期の奥羽と列島の仏教―天台別院・権門延暦寺・如法経進行―」『兵たちの極楽浄土』高志書院　二〇一〇年）

（89）斉藤利男『平泉　北方王国の夢』（講談社選書メチエ　二〇一四年）

（90）『青森県史』（前掲註（80）「北方史関係官人補任表」）